

| | |
|------|--------------------------|
| タイトル | 囚人医師ミクローシュ・ニスリの回想録について |
| 著者 | 木村, 和範; KIMURA, Kazunori |
| 引用 | 北海学園大学学園論集(187): 75-93 |
| 発行日 | 2022-03-25 |

囚人医師ミクローシュ・ニスリの回想録について

木 村 和 範*

はじめに

1. ユダヤ人の大量移送
2. メンゲレの助手としての囚人医師ニスリ
3. 回想録の新旧英語版
4. 関連文献と映像

おわりに

資料

はじめに

ミクローシュ・ニスリ（1901年7月17日-1956年5月5日）は、ハンガリーのユダヤ人医師である。1944年5月に、ニスリとその妻と娘、そしてニスリの両親とニスリの妹の6人は多くのユダヤ人とともにアウシュヴィッツに移送された。両親と妹はただちにガス殺、妻子はアウシュヴィッツ第2収容所（ビルケナウ収容所）に収容された。ニスリは「コンクリート作業員」としてアウシュヴィッツ第3収容所（モノヴィッツ収容所）⁽¹⁾に収容された。そこには、イー・ゲー・ファ

ルベン社の合成ゴム工場（通称ブナ）⁽²⁾があり、戦争末期には連合軍の空爆目標の1つになったことで知られている。

その後ほどなくして、ニスリはモノヴィッツ収容所からアウシュヴィッツ第2収容所（ビルケナウ収容所）に囚人医師として再移送され、あのヨーゼフ・メンゲレの指揮下に入った。そして、アウシュヴィッツからの「死

ジンカのアウシュヴィッツ第2収容所（ビルケナウ収容所）、③モノヴィッツ/モノヴィッツェのアウシュヴィッツ第3収容所（モノヴィッツ収容所）、そして④それらに付属する多数の付属収容所からなる収容施設複合体である。最も規模が大きかったのはビルケナウの第2収容所で、収容施設は第1建屋区、第2建屋区、第3建屋区のいずれかにあった。第3建屋区は終焉間際まで造成が続き、一部使用された。第1建屋区と第2建屋区は、さらに複数の区画（収容区）に分割された。本稿末尾に掲載した「資料1」参照。

(2) 語源は Butadiene-Natrium と言われる。

* 本学名誉教授

(1) アウシュヴィッツ収容所は、①アウシュヴィッツ/オシフィエンチムの基幹収容所（アウシュヴィッツ第1収容所）、②ビルケナウ/ブジェ

の行進」を生き抜き、マウトハウゼンとメルクの収容所(いずれもオーストリア)を経て、1945年5月にエーベンゼー収容所(オーストリア)に収容され、そこで同月解放された。帰国後、ニスリは、収容所における体験の回想録の執筆に着手し、1946年にはそれを母語(ハンガリー語)で公刊した。その回想録は、1960年にはアメリカで、また1962年にはイギリスで英語版が刊行され、多くの国で翻訳された。英語版の刊行から50年を経た2010年には、ポーランド語版を底本とする英語新訳版が次のようなタイトルで刊行された。

Miklós Nyiszli, *I was Doctor Mengele's Assistant: The Memoirs of an Auschwitz Physician*, edited by Franciszek Piper, translated by Witold Zbirohowski-Kościa from the Polish edition (Oświęcim 2000), Frap-Books, Oświęcim 2010, xx+193p.

本稿は、この新英語版を読み進める上で参考にしたいくつかの事柄にかんする覚書である。

1. ユダヤ人の大量移送

ハンガリーは、1944年3月19日にドイツに占領されるまでは、「大量のユダヤ人をドイツの親衛隊に引き渡させ『再移住』させようとしたヒトラーのあらゆる試み、換言すればアウシュヴィッツのガス室で殺害しようとした試みに抵抗していた。」⁽³⁾しかし、占領下

でハンガリー首相に就任したデメ・ストヤイは、ユダヤ人にたいするダビデの星の着用、私有財産の没収、ゲッターへの強制収容など、様々な反ユダヤ政策を積極的に矢継ぎ早に推進した。ユダヤ人の大量移送もストヤイ政権のもとで策定され、強力に実行に移された。生還者が5%にも満たないハンガリーのユダヤ人移送について、ニスリの回想録のドイツ語版⁽⁴⁾は次のように注記している。

1944年初頭にハンガリーには79万5,000人のユダヤ人が住んでいた。1944年3月19日にソビエト軍がルーマニアに侵攻しドイツの南東部戦線が崩壊の危機に瀕したときに、ドイツ国防軍は軍事上の理由からハンガリーを占領した。同日、アイヒマンの指揮下にある親衛隊の特別分遣隊がブダペストに進駐し、ハンガリーからのユダヤ人移送に備えた。ドイツの圧力を受けて新政府が樹立され、

Afterword by Bruno Bettelheim, London, Penguin Books, 2012, p. vii. ドイツにたいする抵抗を示したのは、ミクローシュ・ホルティであるが、それについてエバンスは次のように述べている。「ホルティ政権は、ドイツの要求がハンガリーの主権を侵害すると見ていた。おそらくはそれ以上に重要なことは、1943年の年頭にスターリングラードでソビエト軍によってドイツの壊滅的敗北を喫した後にはいよいよ現実味を帯びてきたが、連合国が勝利したとき、ユダヤ人をドイツ軍の手に渡さなかったことで、連合国側の信用を得ておこうという考え方に次第に傾いていったということである」(*op. cit.*, p. viii)。

(4) Miklós Nyiszli, *Im Jenseits der Menschlichkeit: Ein Gerichtsmediziner in Auschwitz*, Übersetzerin: Angelika Bihari, Bearbeitung der 2. Auflage: Andreas Kilian und Friedrich Herber, Berlin, Karl Dietz Verlag, 1992, Anm. 1, S. 157.

(3) "Introduction" by Richard J. Evans, in: Miklós Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eyewitness Account*, translated by Tiebère and Richard Seaver, "Introduction" by Richard J. Evans with an

他方でドイツの在外公館では、新たに任命された公使兼全権大使の〔エトムント・〕フェーゼンマイヤーが権力を継承し、実権を握るところとなった。

1944年の4月末にはすでにカルパチア-ウクライナ地方から小編成の移送列車がアウシュヴィッツに到着したが、大量移送の始まりは1944年5月16日である。6月7日までに92本の移送列車で289,367人のユダヤ人がカルパチアとズィーベンビュルゲンから移送された。7月9日までにその人数は437,402人のほり、移送列車は147本になった。そのうち、少なくとも90%はアウシュヴィッツに移送された。その後、ハンガリー政府は突如フェーゼンマイヤーに「ユダヤ人作戦」の終了を通告した。しかし、そのときまでの数週間は、毎日、3本～5本の移送列車で、9,000人～15,000人がアウシュヴィッツに到着し、大部分はただちにガス室で殺された。戦後、生還したのはわずかに20,000人にすぎない。

1944年6月には、いわゆるハンガリー作戦の一環としてアウシュヴィッツに大量の新規到着者があったために、アウシュヴィッツ-ビルケナウ強制収容所では新たに収容区を造成しなければならなかった。それが、BⅡc収容区であり、〔「メキシコ」と言われた〕造成中の第3建屋区であった。BⅡe収容区は、新規収容者に当てられた〔資料1参照〕。

ハンガリー人の医師ミクローシュ・ニスリとその家族が乗った移送列車は、ア

クナス・ラテナ・ゲッター〔ルーマニアとウクライナの国境を画すティサ川を挟んで、シーゲット（ルーマニア）の対岸にあるソロトヴィノ（ウクライナ）〕を1944年5月22日に出発し、1944年5月27日にアウシュヴィッツに到着した。囚人登録に日数を要し、ドクター・ニスリの囚人番号A 8450は5月29日に発行された（〔 〕内は引用者による。以下同）。

このように、ドイツは対ソ橋頭堡を確保するために、ハンガリーに親独政権を樹立し、それとともに、占領したハンガリーにおいても「国是」としてのユダヤ人政策を貫徹すべく、アドルフ・アイヒマンを指揮官とする実行部隊（分遣隊）をブダペスト（ハンガリー）に派遣した。全権大使のフェーゼンマイヤーとアイヒマンは車の両輪となって、「ユダヤ人問題の最終解決」に邁進した。「じっさいに、フェーゼンマイヤーはアイヒマンによる殺人作戦の実行を外交面でカモフラージュする役割を果たした。」⁽⁵⁾

他方で、ユダヤ人の大量移送に備えるべく、アウシュヴィッツでも対策が加速された。以下、ダヌタ・チェク⁽⁶⁾によって経過を述べる。

1943年11月11日にアウシュヴィッツ複

(5) “Veesenmayer, Edmund,” Shoah Resource Center, Yad Vashem, in: https://www.yadvashem.org/odot_pdf/Microsoft%20Word%20-%206338.pdf, accessed on September 26, 2021.

(6) Danuta Czech, *Kalendarium der Ergebnisse im Konzentrationslager Auschwitz-Birkenau 1939-1945*, 2. Auflage, Reinbek bei Hamburg, 2008, and ditto, *Auschwitz Chronicle 1939-1944*, New York, 1990.

合収容施設の総司令官をアルトゥール・リーベンシャルに引き継いだドルフ・ヘスは、1944年5月8日に再び総司令官の地位に就いた。それは、ハンガリーからのユダヤ人の大量移送、移送者の大量殺戮、そして死体への諸措置に備えるべく、ハインリヒ・ヒムラーの命を受けたためであった。就任の翌日(5月9日)に、ヘスが発した命令は以下のとおりである[資料1, 2, 3]。①到着する移送列車のプラットフォームの拡幅(いわゆる「新ランプ」の建設)、②第4(5)死体焼却場⁽⁷⁾の再稼働、③同死体焼却場近くに5ヶ所の死体焼却溝(野外の死体焼却場)の掘削、④臨時ガス室(第2 bunker⁽⁸⁾、第4(5)死体焼却場の西側にあったいわゆる「白い小屋」)の再稼働、⑤第2 bunker付近に脱衣小屋の建設、⑥以上を実行するための全死体焼却場の指揮官としてオットー・モルの任命。さらに同日、ヘスは、①死体焼却場で死体の処理に当たる作業員(特別作業部隊^{ゾンダーコマンド})と②移送者から没収した携行荷物の整理・保管に当たる作業員(い

いわゆる「カナダ」での作業員)の増員を命令した。

ドイツ政府(本国および現地ブダペストの在外公館)とハンガリー政府が推進した移送方針は、アイヒマンによって実行に移されたことはすでに述べた。1944年におけるハンガリーからのユダヤ人のアウシュヴィッツへの移送について、フェーゼンマイヤーが本国に宛てた終了報告(および予定報告)は以下のとおりである(ダヌタ・チェクによる)。

5月25日 150,000人移送終了(第1区(カルパチア)、第2区(ズィーベンビルゲン)、第3区(ブダペスト北部))。他に約65,000人を6月11日~16日に移送予定。

6月30日 289,357人(第1区、第2区)[6月7日移送終了]。

50,805人(第3区)[移送:6月11日~16日]。

41,449人(第4区(ブダペストを除くドナウ川東岸地区)) [移送:6月25日~28日]。

381,661人(第1区~第4区)。

7月11日 55,741人(第5区(ドナウ川西岸地区))(7月9日移送終了)。

移送総数 437,402人(第1区~第5区)。

この結果、7月29日に総司令官職をリヒャルト・ベアがヘスから引き継ぐ直前の7月12日には、アウシュヴィッツ全体に収容された

(7) アウシュヴィッツ基幹収容所(アウシュヴィッツ第1収容所)にある死体焼却場を第1死体焼却場とする番号系では、ビルケナウの第1死体焼却場は第2死体焼却場となる。したがって、第4(5)死体焼却場という表記は、ビルケナウの死体焼却場だけの番号系では第4死体焼却場を指すが、基幹収容所の死体焼却場も入れる番号系では第5死体焼却場を指す(他の死体焼却場についても同様)。

(8) Bunker 2をはじめとするアウシュヴィッツの諸施設の映像化については、ブラハ(チェコ)のスマーフ中等工業専門学校(Smíchovská střední průmyslová škola, SSPŠ: Smichov Secondary Technical School)が開設した <https://auschwitz.sspš.cz/>, accessed on September 26, 2021を参照。



写真1 ビルケナウのランプで待機するハンガリーからのユダヤ人（1944年親衛隊撮影）

- (1) 写真左後方には「死の門」が写っている。
- (2) 右側には逆L字型の有刺鉄線の柱が写っている。その向こう側のエリアが第1建屋区。ランプの左側は第2建屋区。男女とも収容区に収容された者は極めて少ない。
- (3) ランプを直進すると、第1(2)死体焼却場と第2(3)死体焼却場がある。死体焼却場の番号系については脚注7参照。

[出所] ニスリの回想録（新英語版）所載のグラビア1，以下でも閲覧可能。Yad Vashem Photo Archives, in: <https://encyclopedia.ushmm.org/content/en/photo/arrival-of-hungarian-jews-at-auschwitz>, accessed on September 29, 2021.

囚人は92,208人になった⁽⁹⁾。アウシュヴィッツに移送されたハンガリーのユダヤ人は、一時的に同所に抑留された後、さらに他の収容所に移送されることもあったが、多くは到着後ただちにガス室で殺された（写真1）。

移送が一段落した後もハンガリーではユ

ダヤ人の惨劇が続いた。1944年10月15日にホルティから権力を奪取したフェレンツ・サラシが率い、ナチスをモデルとする矢十字党と民兵によって多数のユダヤ人が殺害された。ソ連軍とルーマニア軍の侵攻を前に、1944年12月9日にサラシは西方のソンバトヘイ（ハンガリー）に逃れたが、翌年までブダペスト市内では虐殺が続いた。ドナウ川の川辺で殺害されたユダヤ人だけでも相当数に上ると言われている（写真2参照）⁽¹⁰⁾。

(9) 内訳は、第1収容所（アウシュヴィッツ基幹収容所）14,386人、第2収容所（ビルケナウ収容所）51,117人（男性19,711人、女性31,406人）、第3収容所（モノヴィッツ収容所）26,705人である（Czech, *Kalendarium (Chronicle)* [脚注6] の7月12日の項参照）。

(10) 射殺する前に犠牲者には靴を脱がせ、2人か3人を紐で縛り、1人を射殺してドナウ川に



写真2 「ドナウ川遊歩道の靴」(2019年9月17日, 筆者撮影)
(2005年4月16日設置, ブダペスト/ハンガリー)

[注記] ドナウ川の川縁で1944年～1945年の冬に矢十字党によって虐殺されたユダヤ人を悼むモニュメント(1940年代の大人(男女)と子どもの靴60足)が国会議事堂から歩いてすぐのドナウ川の岸辺にある。このモニュメントの建設については Tamas Szabo, *Shoes on the Danube Promenade (Schuhe am Donauufer), Memorial in Budapest: documents, witnesses, letters about 8. January 1945, 154 rescued persons*, Ebook, http://mek.oszk.hu/09600/09621/pdf/danube_bank.pdf, accessed on September 28, 2021 を参照。ドナウ川の川辺で殺害された人数は、数百人とも2万人とも言われている。

2. メンゲレの助手としての 囚人医師ニスリ

モノヴィッツに移送されたニスリは、ほどなくして豊かな法医学的知識と解剖医としての経験を有していることが知られるところと

なり⁽¹¹⁾, それに注目したヨーゼフ・メンゲレは助手として手元に置くことにした。爾来「死の行進」(1945年1月)までのおよそ6ヶ月間, ニスリは特殊作業部隊^{ゾンダーコマンド}とともに, 囚人医師としてアウシュヴィッツ第2収容所(ビルケナウ強制収容所)の第1(2)死体焼却場に

落とした。浮き上がった生存者は射撃訓練的になった。当時、靴は貴重品だったために、犠牲者の靴は殺害者が履いたり闇市で売られたりした (Sheryl Silver Ochayon, “The Shoes on the Danube Promenade-Commemoration of the Tragedy,” by Yad Vashem: The World Holocaust Remembrance Center, in: <https://www.yadvashem.org/articles/general/shoes-on-the-danube-promenade.html>, accessed on September 29, 2021)。

(11) ニスリは1930年にブレスラウ(現プロツワフ)大学に博士学位論文を提出した。そのタイトルは, *Selbasmordarten auf Grund des Sektionsmaterials des Breslauer Gerichtsärztlichen Instituts von Juni 1927-Mai 1930* である。ニスリは学位修得後, 妻子とともに帰国し, ナジヴァラト(ハンガリー名)/オラデア(ルーマニア名)で総合医として開業するとともに, 警察医を務めた。

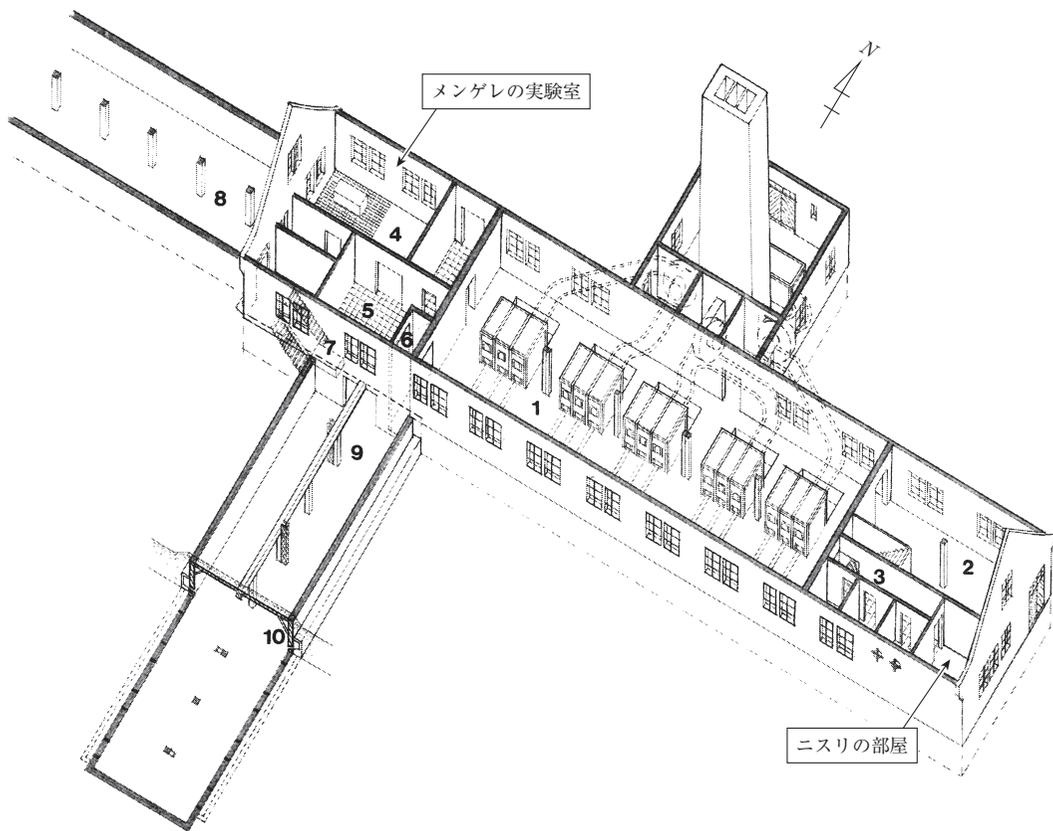


図1 第1(2)死体焼却場の建屋（ビルケナウ）とニスリの部屋

1：炉室，2：燃料庫，3：囚人居室，4と5：解剖室，6：死体運搬用エレベータ，7：エレベータ前の階段下ロビー，8：脱衣室，9：ガス室 [図中の数字9の側にある柱状筒はチクロンBの顆粒が落下するペント]，10：換気孔

[注記]

- (1) ガス室（地階）の図は途中で切れているが、その奥行き（図の横方向）はおよそ50mであり、死体焼却場の建屋（1階）の横幅（地上部分）はおよそ55mである。
- (2) 死体運搬用エレベータには、ガス室側と炉室側の2ヶ所にドアがあった。
- (3) この図には描かれていないが、屋根裏部屋には囚人の寝室があった。
- (4) 図1では解剖台が部屋の西側に、東西方向に設置されている。しかし、図2（ニスリの回想録（新英訳版）所載のグラビア17では4は間仕切りで2分され、左側がメンゲレの個室（左）と解剖室（右）となり、解剖台は南北に向けて設置されている（図2参照）。

[出所] Debórah Dwork and Robert Jan van Pelt, *Auschwitz*, revised and updated, New York and London 2008, p. 270. ただし、矢印（2本）は引用者による。

配属された。そこには、メンゲレの執務室とともに解剖室が設置されていた（図1，2）。ビルケナウの死体焼却場は、「ユダヤ人問題の最終解決」の最終段階における最大級の舞台と言っても過言ではない。そこに居室をあ

てがわれた囚人医師のニスリは、移送直後の新規到着者（あるいは既収容者）にたいする大量虐殺を目撃したり、^え似^せ而非科学的な目的からの人体実験と解剖を目の当たりに体験したりした。以下では、ニスリの回想録の中か

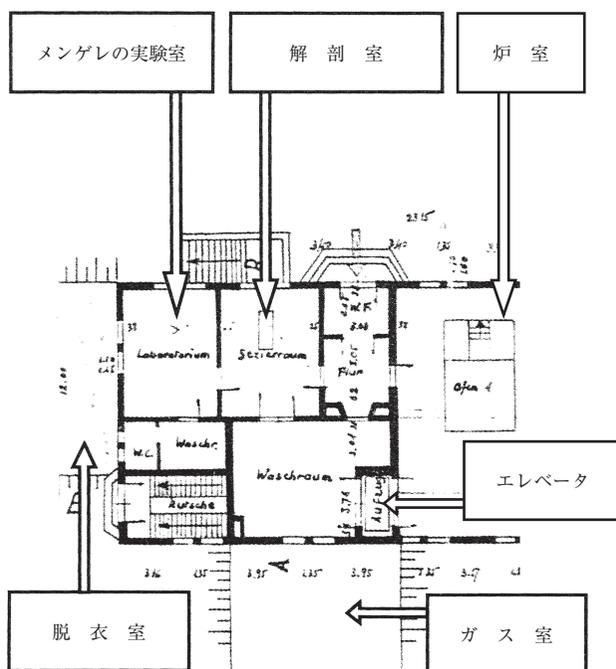


図2 第1(2)死体焼却場(部分)

[出所] ニスリの回想録(新英語版)所載のグラビア17(部分)に加筆

らおぞましい事例を2つだけ取りあげる。
 チクロンB⁽¹²⁾で殺された犠牲者の死体を

ガス室から出して、エレベータで炉室まで上げ、それを炉前に引きずり出してからの様子は次のとおりである。

(12) 「アウシュヴィッツ-ビルケナウ記念博物館 (Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum)」によるチクロンBの説明は以下のとおり。「当初は、デゲシュ社 (the Degesch company) 製の害虫駆除専用殺虫剤であった。1941年の夏の終わり頃から、アウシュヴィッツ第1収容所 (基幹収容所) の囚人やソ連の捕虜を殺害するために散発的に使用されたが、1942年の春以降は、ビルケナウ収容所のガス室におけるユダヤ人の殺害に定期的に使用された。チクロンBの形状は、シアン化水素 [青酸] を吸着させた珪藻土の粒であり、適温 (約27度) で気化して青酸ガスを放出する。これを吸入すると、赤血球内の酸素交換が妨げられ細胞呼吸が阻害されて、犠牲者はいわゆる体内窒息の状態に陥る。1942年から1944年の間にアウシュヴィッツには、少なくとも25トンのチクロンBが搬入された。戦後、ルドルフ・ヘスが証言したところによれば、この殺虫剤

「第三帝国の財産は金^{きん}ではなく、労働力である」というのは多用されたナチスのスローガンの一つであった。これは、まったく事実とは異なる。炉前には「歯科医」が8人立っていた。手には2種類の医療器具、ではなくて工具もっていた。ノミとペンチの2つだ。彼らは死体を上向きにして、何かすさまじいことを

で1,500人を殺害するのに、5kg~7kgが必要だった。」(“Zyklon B,” *Mini Dictionary*, in: <http://auschwitz.org/en/press/mini-dictionary/#Zyklon%20B>, accessed on September 27, 2021.



写真3 第1(2)死体焼却場の炉室（1943年親衛隊撮影）

〔注記〕 3連の炉が5基あり、全部で15基の炉があった。第2(3)死体焼却場も同様。撤退時に解体・爆破（資料1, 2, 3参照）。

〔出所〕 ニスリの回想録（新英語版）のグラビア15。なお、この写真は以下のサイトでも閲覧可能である。<https://www.jewishvirtuallibrary.org/crematoria-and-gas-chambers-at-auschwitz-birkenau>, accessed on September 26, 2021.

し始めた。抜歯すると言うよりは、むしろ口をこじ開け乱暴にブリッジと金歯を引きちぎった。この作業員はトップクラスの歯科医であったり、外科医であったりした人だ。ドクター・メンゲレは、収容所で歯科治療を計画していると言って専門医を募集した。彼らは専門家にふさわしい仕事があたえられると思って志願した。ところが、私と同じように地獄の死体焼却場に入れられてしまった。（ニスリの回想録（新英語版），39頁）

中欧では1930年代に歯科治療でクラウンやブリッジなどに金が使用されるようになり、ヒムラーは死体から金歯の回収を命令し

た。これにより、1943年の夏が終わる頃に、第2(3)死体焼却場の1階に金の精錬所が設置され、相当量の金がドイツ帝国銀行に輸送されたと言われている。金歯から回収した金については関連資料がほとんどないために、詳細は不明であるが、「アウシュヴィッツ-ビルケナウ記念博物館（Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum）」のHPに公開された『小事典（Mini Dictionary）』は、「歯科用金（Dental gold）」の項で次のように述べている⁽¹³⁾。

(13) “Dental gold”, *Mini Dictionary*, in: <http://auschwitz.org/en/press/mini-dictionary/#Dental%20gold>, accessed on September 27, 2021. なお、ニスリの回想録のドイツ語版（脚注4）によれば、アウシュヴィッツでは月あたり10 kg～18 kgの金

死亡した囚人の歯から回収した金は親衛隊衛生部に届けられ、そこを經由して親衛隊員とその家族のための歯科室に分配された。1942年10月初旬までに、同衛生部は50kgの金を保有していた。これは5年分の歯科治療をまかなうのに十分な量であった。

この金とそれ以外の歯科用金属はアウシュヴィッツから輸送されたが、その量は分からない。収容所の歯科室による、一部現存する文書によれば、1942年下半年には、死亡した囚人2,904人から、金または貴金属の合金で補綴された16,325本の歯が抜き取られた。この圧倒的多数は、ガス室で殺害されたユダヤ人の死体からであった。収容所内で抵抗運動にかかわったメンバーは、親衛隊が犠牲者の歯から1ヶ月に獲得した金を10kg～12kgと推測している。

文字通り刈り取られた毛髪は衣料や兵器に使用され、死後、炉前で抜歯されるばかりか、遺灰・遺骨はヴィスワ川や収容所敷地内に放棄されたり、肥料の原料として販売されたりした。「死後には自分の墓に入ることも否定された」のである(ニスリの回想録(新

が回収された(Anm. 48, S. 169)。ニスリは金の「毎日の『生産量』」が30-35kgと書いているが(新英語版, 55頁)、「毎日」が正しくは「毎月」の誤記であるかどうかを含めて検討を要する。なお、収容所内の歯科治療などにかんしては Benjamin Jacobs, *The Dentist of Auschwitz: A Memoir*, Lexington, University Press of Kentucky, 1995 (『アウシュヴィッツの歯科医』上田祥士監訳, 向井和美訳, 紀伊國屋書店, 2018年)を参照。

英語版), 143頁)。

次は、メンゲレなどのナチス高官が、「民族的劣等性」を示す証拠が得られたとして嬉々とする様子についてのニスリの回想である。犠牲者は、リッツマンシュタット/ウッチ・ゲットーから移送されたユダヤ人で、脊柱側弯症(hunchback)の父と短肢症(hypomelia)のその息子(15歳)である。

ガソリンで洗浄した骨を実験助手が見事に組み立てた。犠牲者は、一日前は、まだ生きていた。その二人の骨は、私がきのう診察したあの部屋のテーブルの上に置かれていた。

メンゲレ博士はたいそう喜び、医官の高級将校を何人か招待して、その骨を見せた。彼らは、優越感に浸って様々な部分に触り、競って専門用語をひけらかし、骨に見られる障がいがあったかも科学的発見であるかのように、嬉々としていた。似而非科学だ。科学の衣を装った戯言にすぎない。この人たちには特異な異常はなかった。似たような障がいは、世界中の何十万もの人間に見られる。たとえ患者の数が少なかったとしても、医者であれば、このような事例を見かけることがあり得る。ナチの扇動的宣伝は、それが嘘であろうと、狡猾なやり方で見せかけた科学的客観性であろうと、目的のためにはどんなに些細なことでも徹底的に利用し尽くそうとしている。博物館でこのような扇動的宣伝目的の展示物を見る人は、そのほとんどが批判的な知識を欠いているから、言いなりになってしまうことである

う（ニスリの回想録（新英語版）、140頁）。

ニスリの回想録には、このような目撃証言がいくつも収められていて、ホロコーストが、どのような考え方によってどのように進められたかが具体的に述べられているが、それとともにアーリア民族の繁殖促進と「劣等」とされた民族（主としてユダヤ人）の根絶やしを目的としたヒトラー「第三帝国」における人種政策の理念とその背景が明らかにされている。ニスリは、みずからの体験を歴史の中に位置づけることによって、人間を「生きる権利をもって生まれた者」と「生きる権利をもたずに生まれた者」に、二分する考え方の根源を析出している。このような考え方は、直截的に、あるいは形を変えてもっとスマートにもっとグロテスクに、いつもわれわれの身近にある。この意味で、ニスリの証言は、どこにでもありうる思考様式の危うさに警鐘を鳴らしていると言えるのではないか。

3. 回想録の新旧英語版

ニスリの回想録は1946年にハンガリー語で出版され、そのタイトルは *Orvos voltam Auschwitzban*（私はアウシュヴィッツの医者だった）である。その後、様々な国で翻訳書が刊行された。これ以外にも、戦争の記憶が鮮明だった頃に刊行されたホロコースト生還者の回想録としては、1947年に刊行された Viktor E. Frankl, *Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager* がある⁽¹⁴⁾。同年には、

Olga Lengyel, *Five Chimneys: The Story of Auschwitz*⁽¹⁵⁾ および、Primo Levy, *Se questo è un uomo*⁽¹⁶⁾ が刊行された。さらに、1948年には Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*⁽¹⁷⁾ も公刊された。これらが強制収容所の実態を明らかにする貴重な証言であることは言うまでもない。これにたいして、「死の天使」メンゲレの助手として人体実験の枢要な地位にあったニスリの回想録は強制収容所を内側から見た記録であり、そこには第三帝国が秘密にして

の体験記録」霜山徳爾訳、みすず書房、1961年。新版（池田香代子訳）が同社より2002年に刊行された。

- (15) オルガ・レンゲル『アウシュヴィッツの五本の煙突』金森誠也訳、筑摩書房〔世界ノンフィクション全集28〕、1962年。
- (16) プリモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない あるイタリア人生存者の考察』竹山博英訳、朝日選書151、1980年、同『これが人間か（改訂完全版 アウシュヴィッツは終わらない）』竹山博英訳、朝日選書905、2017年。
- (17) International University Press (New York) から出版されたこの回想録は、長らく絶版となっていたが、2016年2月19日に The Internet Archive に Opensource として全文が PDF ファイルとして公開された (<https://archive.org/details/IWasADoctorInAuschwitz/mode/2up>, accessed on October 8, 2021)。最近になって以下が公刊された。①Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, with “Introduction” by Phillis Lassner and Danny M. Cohen with “Afterword” by Eva Hoffman, Lahlem, Boulder, New York, London Lexton Books/The Rowan & Littlefield Publishing Group, Inc., 2019；②Gisella Perl, *Ich war eine Ärztin in Auschwitz*, übersetzt von Klaudia Ruschkowski und herausgegeben von Andrea Rudorff, mit der „Einführung in die deutsche Ausgabe“ von A. Rudorff, Wiesbaden, Verlaghaus Römerweg GmbH, 2020。なお、次も参照。木村和範「書評 Gisella Perl, *I was a Doctor in Auschwitz*, New York, International University Press, 1948, 189 p.」『開発論集』（北海学園大学）第109号、2022年3月。

(14) V. E. フランクル『夜と霧 ドイツ強制収容所

おきたいこと、けっして外部にはもらしたくないことを内側から見た体験記である。その点で、「秘密を握った者 (Geheimnisträger, secret bearers)」(グライフ/キリアン) のひとりとしてのニスリの回想録は異色である。

ニスリの回想録の英語版は、ティバー・クレマーとリチャード・シーバーが翻訳し、1960年にアメリカで、そして1962年にはイギリスで出版され、同一内容の書籍は、2011年にアメリカでも出版されている⁽¹⁸⁾。さらに、2012年には、ペンギン・モダン・クラシックスの一冊としても刊行された。ただし、この2012年に刊行されたペンギン・モダン・クラシックス版では1960年英語版と2011年英語版に収録されていたシーバーの前書きが削除され、新たにリチャード・J. エバンスが書き下ろした解説が収録されている⁽¹⁹⁾。ニスリ自身が執筆した回想録には、日付、親衛隊員の階級名称などについての記憶違いや殺害人数、死体焼却場の処理能力についての間違い、あるいは当時の強制収容所における伝聞情報やニスリの思い違いにもとづ

く叙述がある。上記の複数の英語版(回想録の本文は同一)では、それらが訂正されないままになっている。

本稿の底本としたニスリの回想録は、ヴィトルト・ツビローフスキー-コシアが一部クレマー-シーバー訳を採用しつつも、ポーランド語版⁽²⁰⁾を独自に英語に重訳し、オシフィエンチムのフラップ・ブックス社が2010年に刊行した新英語版である。これが前述の英語版と異なっているのは訳文だけではない。新英語版には、その編者であるフランシセック・ピーベルが選定した写真・資料36点が掲載されるとともに、訂正や補足説明に当たった66ヶ所の注記とニスリの略歴が記載されている⁽²¹⁾。ピーベルは、110万人がアウシュヴィッツで殺され、そのうちの90%はユダヤ人であったことを明らかにするなどの業績を挙げたアウシュヴィッツ-ビルケナウ国立博物館の元歴史部長である⁽²²⁾。このピーベル

(18) ①Miklos [sic] Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eyewitness Account*, translated by Tibere [sic] Kremer and Richard Seaver, with a foreword by Bruno Bettelheim, New York, Frederick Fell, 1960 and London, Panther Books Ltd., 1962; ②Miklos [sic] Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eyewitness Account*, translated by Tibère Kremer and Richard Seaver, with a foreword by Bruno Bettelheim, New York, Arcade Publishing, 2011.

(19) Miklós Nyiszli, *Auschwitz: A Doctor's Eyewitness Account*, translated by Tibère Kremer and Richard Seaver, "Introduction" by Richard J. Evans with an Afterword by Bruno Bettelheim, London, Penguin Books, 2012. ただし、この "an Afterword" は前注 ①、②の "a foreword" と同一である。

(20) Miklós Nyiszli, *Byem asystemem doktora Mengele* (私はメンゲレ博士の助手だった), Oświęcim 2000.

(21) 新英語版には、"Editing and footnotes: Franciszek Piper" とある。

(22) Franciszek Piper, *Auschwitz: How Many Perished Jews, Poles, Gypsies, ...*, Kraków, Frap-Books, 1992. アウシュヴィッツ-ビルケナウ記念博物館のHPは、ピーベルの研究にもとづいて、アウシュヴィッツの犠牲者数について、ユダヤ人100万人、ポーランド人7万人~7万5,000人、ジブシー2万1,000人、ソ連軍の捕虜1万5,000人、その他1万人~1万5,000人、合計約110万人と述べている。"Overall numbers by ethnicity or category of deportee," by Auschwitz-Birkenau Memorial and Museum, in: <http://auschwitz.org/en/history/the-number-of-victims/overall-numbers-by-ethnicity-or-category-of-deportee>, accessed on September 13, 2021).

による注記を収めていることが、新英語版の特徴となっている。回想録については日付の間違いや執筆当時の噂の真偽を正し、可能な限り正確を期することが重要である。それによって回想録の迫真性が高まる。このことはニスリの回想録にも当てはまる。キデオングライフとアンドレアス・キリアンは、ニスリの回想録を生存者による聞き取りによって訂正することの必要性を指摘しているが⁽²³⁾、そのとおりである。新英語版の注記はその役割を果たし、ニスリの回想録を「真実と作り話のとんでもない雑炊 (disconcerting mixture of truth and non-truth)」⁽²⁴⁾ とする見解を正すものとなろう。ニスリの回想録のドイツ語版⁽²⁵⁾ には146ヶ所に及ぶ注記があって、その学術上の意義は高い。ペンギン・モダン・クラシックス版の「序文」として書き下ろしたエバンスの解説⁽²⁶⁾ とともに、ドイツ語版

の注記は末期のアウシュヴィッツを巡る状況をいっそう鮮明にすると期待できる。

4. 関連文献と映像

強制収容所の死体焼却場で使役された^{ゾンダーコマンド}特殊作業部隊の回想記としては、Shlomo Venezia, *Sonderkommando: Dans l'enfer des chambres à gaz*, Paris 2007 がある⁽²⁷⁾。ニスリは、特殊作業部隊が密かに死体焼却場の実態を文書にして、死体焼却場の付近に埋めたと言っている。それはまだ発見されてはいないが、別の文書が発見されたことはニスリの新英語版の注記⁽²⁸⁾ にあるとおりである。これらの発見文書の解読については Nicholas Chare and Dominic Williams, *Matters of Testimony Interpreting the Scrolls of Auschwitz*,

(23) Gideon Greif and Andreas Kilian, "Significance, responsibility, challenge: Interviewing the Sonderkommando survivors," *Sonderkommando-Studien*, Sep. 6, 2011, in: <http://www.sonderkommando-studien.de/artikel.php?c=forschung/significance>, accessed on August 20, 2012.

(24) Charles D. Provan, "Conclusions about Nyzsli's Book and His Other Writings" of "New Light on Dr. Miklos Nyzsli and His Auschwitz Book," *The Journal of Historical Review/Issues*, in: https://www.unz.com/pub/jhr_new-light-on-dr-miklos-nyzsli-and-his-auschwitz-book/, accessed on September 16, 2021.

(25) 脚注3参照。

(26) エバンスの解説は、ドイツのポーランド侵攻の歴史的背景とその経緯、アウシュヴィッツにおけるニスリの立ち位置、ニスリを取り巻く親衛隊員（ヨーゼフ・メンゲレ、フリッツ・クライン、オットー・モル、エーリヒ・ムースフェルト）、そしてベルリンのカイザー・ヴィルヘルム人類学、遺伝学、優生学ベルリン研究所長フェルシュアとメンゲレの関係に言及

しつつ、移送から解放までを概観し、それに続けて、ニスリによる回想録の最初の英語版に掲載されたブルーノ・ベッテルハイムの「まえがき」を批判的に考察している。ここに、ベッテルハイムは、*The Informed Heart, The Free Press, New York, 1960*（『鍛えられた心—強制収容所における心理と行動—』丸山修吉訳、法政大学出版会、1975年）の著者としてこの国でも著名である（この著書の第6章ではニスリに言及している）。

(27) シュロモ・ヴェネツィア『私はガス室の「特殊任務」をしていた—知られざるアウシュヴィッツの悪夢』鳥取絹子訳、河出書房新社、2008年。

(28) 「これまでのところ、この証拠文書 [ニスリたちが埋めたとされる文書] は発見されていない。しかし、これ以外の6編の証拠文書が、調査の結果として、あるいはまったく偶然に、見つかった。1945年に3編、そして1952年、1962年、1980年に1編ずつである。このうち4編は、ニスリが言うように、第2(3)死体焼却場の周辺に埋められていた。」（ニスリの回想録（新英語版）の注42、95頁）。

New York & Oxford, Berghahn Books, 2016 がある⁽²⁹⁾。この著書でも取りあげられている特殊作業員^{ゾンダーコマンド}のひとり Zalman Gradowski の遺稿の英語版 *From the Heart of Hell: Manuscripts of a Sonderkommando Prisoner, found in Auschwitz* が 2017 年にアウシュヴィッツ-ビルケナウ国立博物館から発刊され、2021 年には Kindle 版も公開されたほか、2019 年にはドイツ語版も刊行された⁽³⁰⁾。特殊作業部隊が撮影した 4 枚の写真を取りあげた Georges Didi-Huberman, *Images malgré tout*, Paris, Les Éditions de Minuit, 2003 も刊行された⁽³¹⁾。また、2020 年 8 月 26 日には、『NHK スペシャル アウシュビッツ 死者たちの告白』の放映内容が文書化されて公開された (<https://www.nhk.or.jp/special/plus/articles/20200825/index.html>, accessed on August 22, 2012)。ここに「死者」とは、「最終解決」の最前線にあって死体焼却場周辺に密かにその実態を隠した特殊作業部隊^{ゾンダーコマンド}のことである。最後に、ニスリの回想録にもとづいて、2 本の映画 (ティム・ブレイク・ネルソン監督『灰の記憶』とラーズロー・ネメシュ監督『サウルの息子』)⁽³²⁾ が本邦でも公開されていることを付言する。

(29) ニコラス・チェア／ドミニク・ウィリアムズ『アウシュヴィッツの巻物 証言資料』二階宗人訳、みすず書房、2019 年。

(30) Salmen Gradowski, *Die Zertrennung: Aufzeichnungen eines Mitglieds des Sonderkommandos*, herausgegeben von Aurélie Kalisky unter Mitarbeit von Andreas Kilian, aus dem Jiddischen von Almut Seiffert und Miriam Trinh, Berlin, Jüdischer Verlag im Suhrkamp Verlag, 2019.

(31) ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』橋本一径訳、平凡社、2006 年。

おわりに

ニスリの回想録の記載事項については、事実と突き合わせて正すべきところがある。たとえば、アウシュヴィッツに着いたニスリは、一度はモノヴィッツに送られ、その後、ビルケナウに配属替えとなった。しかし、回想録 (新英語版, 10 頁) では、ビルケナウのランプでの選別後、その日のうちにメンゲレの指示で解剖医として死体焼却場に配属されたことになっている。ペンギン・モダン・クラシックス版に「序文」を執筆したエバンスは、「おそらく話を単純化するために、回想記からはこのことを省略したのであろう。」と語っている⁽³³⁾。また、ドイツ語版では、モノヴィッツの件が書かれていないのは「ドラマツルギー的な理由」であると述べている⁽³⁴⁾。

本稿で取り上げた新英語版は回想録の記載内容を事実と付き合わせるという課題に自覚的に取り組んだピーペルの試みによって、迫真性が高められた訳書になった。この試みは、ドイツ語版を編集したキリアンとハーバーによる試みと通底するものがある。これらの調査研究を経て公刊されたニスリの回想録を読者はどう読むか、何を読み取るかが、改めて問われている。

ニスリの回想録の旧英語版にたいしてベッテルハイムは、その回想録がナチス体制への抵抗を忘れ、体制に組み込まれ、死ぬことも

(32) *The Grey Zone*, directed by Tim Blake Nelson, 2001; *Son of Saul*, directed by László Nemes, 2015.

(33) “Introduction” by Evans, p. vii (脚注 3).

(34) Anm. 8, S. 159 (脚注 4).

できなかった元囚人の「証言」であると断ずる「緒言」を寄せた⁽³⁵⁾。ベッテルハイムの見解を念頭において、エバンスは以下に引用する問いかけをもって「序文」を擲筆している⁽³⁶⁾。それは、ニスリの回想録が現代社会に何を問いかけているかを考えるときに示唆的である。

……この回想録 [ニスリの回想録] は、自分の振る舞いの不道徳性が分からない男の証言なのか、臆病すぎて抵抗できなかった男の証言なのか、怠業で死ぬには弱すぎた死にぞこないの男の証言なのか。はたまた、この回想録は、1941年[12月8日]にリガで処刑されたときに歴史家シモン・ダブノフ⁽³⁷⁾が仲間のユダヤ人に向けて

「人々よ、このことを忘れるな。語り継げ、人々よ。一切を記録せよ。」
と言ったあの伝説的訓令に従いたいという願望から生まれたものか。

旧英語版のこの問いかけは、新英訳版の読者にもそのまま当てはまる。これまでに指摘したように、ニスリの回想録の記載事項については、事実との突き合わせによって正すべきところがある。事実と原作との突き合わせによって、原作の迫真性はその外被をとって

表出する。モノヴィッツの一件を除けば、ニスリの回想記における記述内容と事実との食い違いは、記憶違いや当時の収容所で誤って信じられていた事柄が書き込まれていたのではないかと推測される程度の内容であって、それらがすべてニスリの意図的な捏造とするには無理がある。捏造する十分な理由がないからである。エーベンゼーで解放されて帰国後、回想録をおそらく一気呵成に執筆したニスリの胆力だけでなく、その記憶力と記憶量に驚かされるが、それをおくとしても、恐怖に駆り立てられて噂話を信じ込むほどに追い詰められた状況の中で、明日は炉前に骸^{むくろ}となって横たわるかもしれない死の不安と向き合った収容所での体験、さらには正確な必要情報が遮断され囚人仲間の風聞を信じざるを得なかった収容所での体験、これらを解放後のニスリは記憶のままに執筆したと考えるのが自然である⁽³⁸⁾。

最後に、アウシュヴィッツ-ビルケナウ収容所が質的にも量的にも効率的に組織化された「死の工場」になるに至った背景について述べる。ピーペル⁽³⁹⁾によれば、アウシュヴィッツ-ビルケナウに収容所を開所した1940年から1944年3月までの移送人数は66万2,000人である。ところが「ハンガリー作戦」（1944年4月～10月の7ヶ月間）によって移送されたハンガリーのユダヤ人は43万

(35) “a forward” by Bettelheim (脚注18).

(36) “Introduction” by Evans (脚注3).

(37) Simon Dubnow については Holocaust Education & Archive Research Team が公開する <http://www.holocaustresearchproject.org/ghettos/dubnow.html>, accessed on September 27, 2021 を参照。

(38) 収容所内の風評から囚人の「認識状況」が分かり、回想録はそのための「史料」としての意義もある。Vgl. Andrea Rudorff, „Einführung“, 脚注17②, S. 25.

(39) Piper, *op. cit.*, Table IV: Number of Jew Deported to Auschwitz-Birkenau by Country of Origin, p. 53. 同書巻末に綴じられた表も参照。

8,000人で、その直前までにアウシュヴィッツが受け入れたユダヤ人66%に当たる。しかもハンガリーから移送されたユダヤ人の99%強(43万6,000人)は、5月~7月の3ヶ月間に集中している。大量移送の、このような短期集中が、「ユダヤ人問題の最終解決」のための最大規模の収容所となったビルケナウ収容所をビルケナウ収容所たらしめたのである。この結果、ビルケナウ収容所には、人体実験の「材料」が大量に集中した。①「劣等」とされるユダヤ人の民族的「退化」を示す証拠を収集するための身体障がい者などの解剖と②「劣等」民族の対極にあるとされる「優秀」

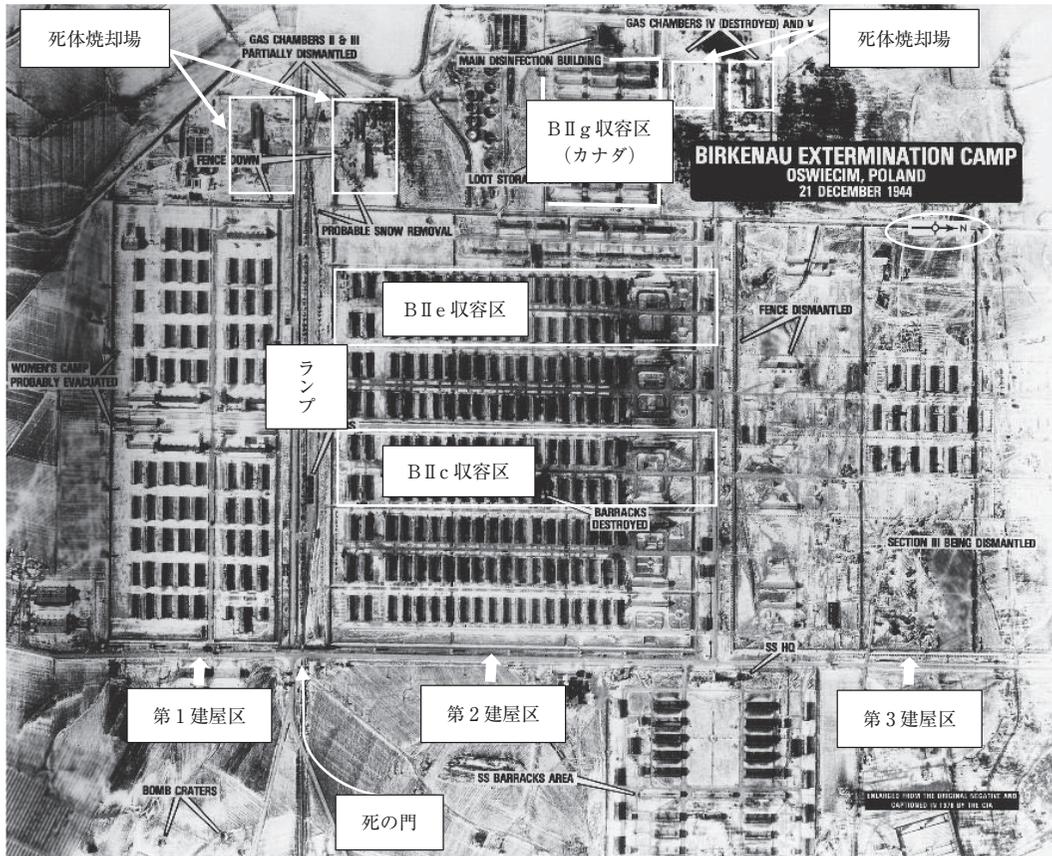
なアーリア民族の繁殖のための双子の「研究」の2つにメンゲレが没頭し、そのために法医学の知識が豊かな解剖医でもあったニスリを特殊な囚人医師として使役した「物質的基礎」とはそのようなものであった。

[付記]

本稿は、Kazunori Kimura, “A Book Review of Miklós Nyiszli, *I was Doctor Mengele’s Assistant: The Memoirs of an Auschwitz Physician*, Frap-Books, Oświęcim (Poland) 2010, xx+193p,” *The Economic Journal*, Hokkai-gakuen University, Vol. 59. No. 3-4, March 2022 に加筆したものである。

資料

1. ビルケナウ収容所

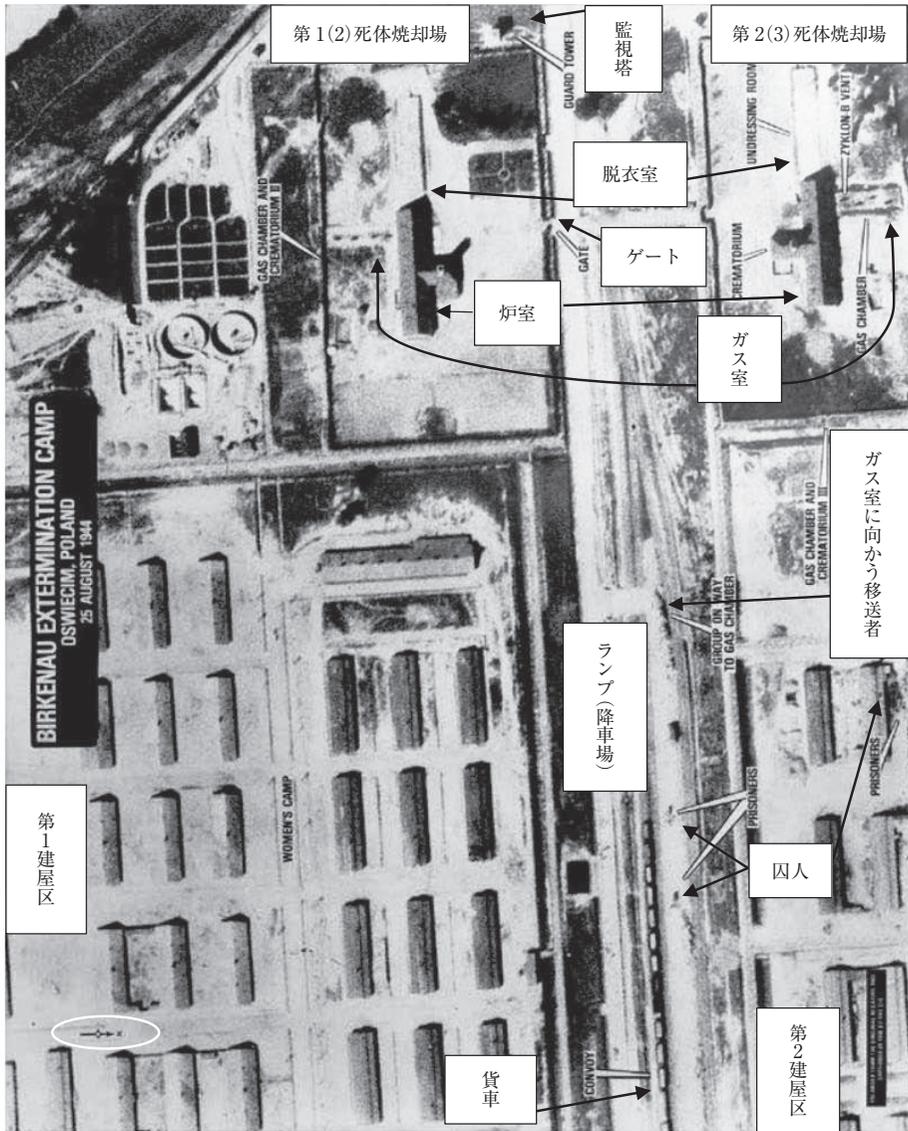


ビルケナウ収容所（1944年12月21日連合軍撮影）

- (1) 上方4ヶ所の四角で囲った死体焼却場（引用者による）は左から順に第1(2)死体焼却場、第2(3)死体焼却場、第3(4)死体焼却場、第4(5)死体焼却場。死体焼却場の番号系については本文の脚注7参照。
- (2) 第3(4)死体焼却場は1944年10月7日に勃発した囚人による蜂起で爆破されたために、その建屋は写っていない。
- (3) 移送列車は「死の門」を通り、新規到着者を「選別」するランプで停車した。
- (4) 第1建屋区は南北約300m×東西約700m。ハンガリーからの移送者のうち「選別」された者は、第2建屋区（南北約600m×東西約700m、ただし、B II g 収容区はこの中には入っていない）のB II c 収容区とB II e 収容区に収容された。第3建屋区（南北約700m×東西約700m、その通称は「メキシコ」）も使用されたが、造成は未完に終わった。
- (5) B II g 収容区は「カナダ」と言われ、移送者から没収した携行荷物を収納する倉庫があった。写真には「Loot Storage Area [略奪品保管区域]」と書かれている。
- (6) 注記は引用者による。

【出所】“Aerial Photos of Birkenau” by Jewish Virtual Library, in: <https://www.jewishvirtuallibrary.org/jsourc/images/Holocaust/acrial122144.jpg>, accessed on September 23, 2021.

2. 死体焼却場とその周辺

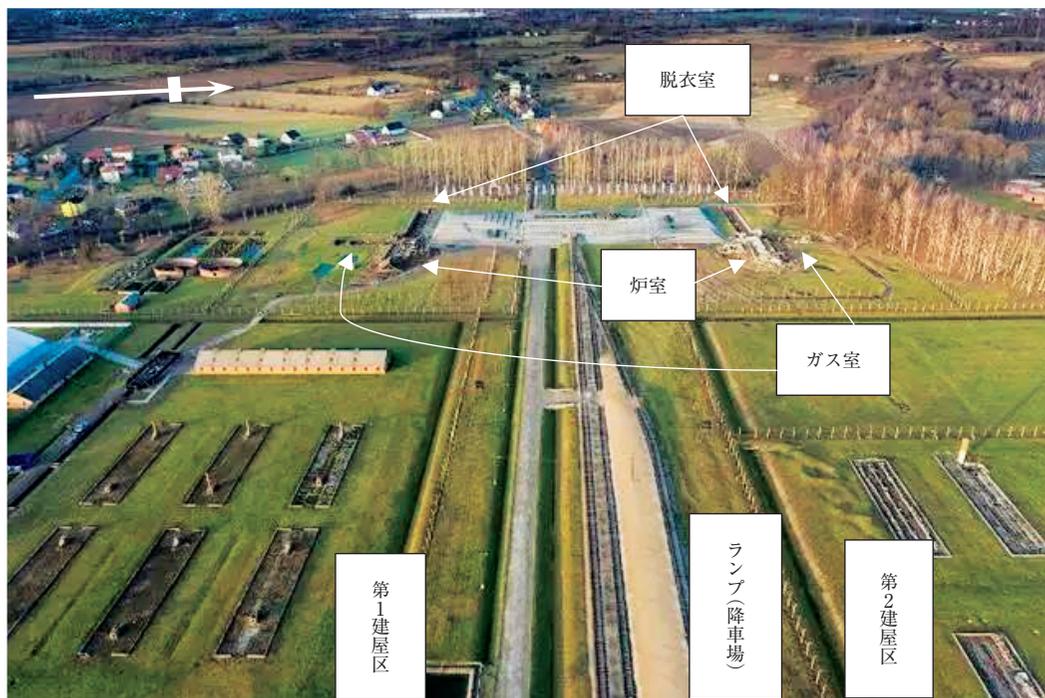


第1(2)死体焼却場と第2(3)死体焼却場 (1944年8月25日連合軍撮影)

- (1) 2つの死体焼却場は基本的に同一設計(鏡像)である。
- (2) 死体焼却場の黒い建物が炉室。炉室の上方(西側)には脱衣室、それと90度の方向に伸びるガス室が写っている。
- (3) 脱衣室とガス室は地下にあったが、写真にはその天井部分が写っている。
- (4) ガス室の屋根にはチクロンBを投入するためのベントの孔が4ヶ所ずつ写っている。
- (5) ランプ(ユダヤ人ランプとも言われた)では、ガス室直行か収容かの選別が行われた。
- (6) 左下の方位を示す矢線にたいするマークを含め、写真への注記(翻訳)は引用者による。

[出所] "Aerial Photos of Birkenau" by Jewish Virtual Library, in: <https://www.jewishvirtuallibrary.org/jsources/images/Holocaust/airial082544.jpg>, accessed on September 23, 2021.

3. 死体焼却場跡とランプ跡



2つの死体焼却場に伸びる鉄道（ランプ）（2019年12月19日撮影）

- (1) 第1(2)死体焼却場（左）と第2(3)死体焼却場（右）の跡。
- (2) この写真には、以下の説明が付けられている。「アウシュヴィッツ第2／ビルケナウ絶滅収容所（ポーランド・オシフィエンチム）の航空写真（2019年12月19日撮影）。2020年1月27日は、ナチス最大の大量殺人のための強制収容複合施設がソ連軍によって解放された75年目に当たる。」

[出所] <https://www.businessinsider.in/slideshows/miscellaneous/photos-show-the-horrors-of-auschwitz-75-years-after-its-liberation/slidelist/73639242.cms#slideid=73639273>, accessed on September 17, 2021. Source: The United States Holocaust Memorial Museum. 写真に記した方位を示す矢線と注記は引用者による。